

# MURALISMO MEXICANO

## LA MARCHA DE LA HUMANIDAD (1971) DAVID ALFARO SIQUEIROS



私が初めて本の中でシケイロスの作品「人類の行進 (La marcha de la humanidad)」に出会った時、それはまさに左のように写真という小さなフレームによって小さく収められ、2次元に完結したひとつの「場面」であるかのように見えました。けれどそんなフレームの中であってすら彼の作品の猛烈なエネルギーは衝撃的で、これは絶対に本物の前に立ってみたい!!!と1人鼻息をふんふんさせたのを覚えています。今月、わたしはついに念願のポリフォルム・シケイロス (Polyforum Siqueiros) を訪ね、実際の「人類の行進」を体験することができました。私の日墨研修の目的の1つであった「メキシコ壁画運動」についての学習は(まがいもなく語学力の問題で;) まだまだ始まったばかりです。今回はその経過報告として、学術的根拠を欠いた(ここ大事)自由がすぎる感想を好き放題でお送りします(要はいつも通り)。

### メキシコ壁画運動 — 教育ツールとしての「芸術」 —

ポルフィリオ・ディアス(1830-1915)による長い独裁政権への反発を契機として巻き起こった、ラテンアメリカ最初の社会主義革命：メキシコ革命(1910-1920頃)。その後の1920年代から30年代にかけて、この**社会主義革命の意義を一般民衆に伝えるために**、また**スペインの侵略によって奪われたメキシコ人(国民)としてのアイデンティティを取り戻すために**(あるいは”創造しなおす”ために)、メキシコでは「壁画運動」なる大規模なモダニズム美術運動が展開されます。この壁画運動を押し進めた人物の中でもとりわけ重要と言えるのが、当時文部大臣であり、**文字の読めない一般民衆への教育ツールとして壁画**(パブリックアート)に価値を見出した**ホセ・バスコンセロス**【写真右上: 大学の講堂の1つには彼の名前がつけられている】と、彼の後ろ盾を得て数多くの作品を公共施設の壁面に残した3人のメキシコ人画家、**ディエゴ・リベラ**、**ダビッド・アルファロ・シケイロス**、**ホセ・クレメンテ・オロスコ**【写真右下: 壁画家達とその支援者の肖像 @Polyforum Siqueiros】です。共産黨員でもあった彼らの芸術活動とは、「芸術作品とは(自己満足的な美の追求にとどまらず)常に明確な社会的意義を持つものでなくてはならない」という信念に基づく、強い政治色に彩られたものでした。その作品の持つ強烈なメッセージ性は多くの人々の度肝を抜き、しかし今やメキシコ国民に限らず、世界中の人々の関心を集め、また深く愛され続けています。



# メキシコは 至る所壁画 だらけ！！

壁画運動時代の作品は他にもメキシコの至る所で目にすることができ、最近ではソカロの国立宮殿でディエゴ・リベラの作品を（①②）、旧サン・インデフォンソ学校博物館でオロスコの作品（④）などを見てきました。私達が日々通っているメキシコ国立自治大学（UNAM）の中央図書館（③：ファン・オゴルマン）やキャンパス内の建物にも著名な壁画家達の壁画がたくさん！キャンパスは世界遺産にも登録されており、学生だけではなく多くの観光客でにぎわっています。



①②：画家フリーダ・カーロの夫としても有名で、派手な女性関係にまつわる様々な逸話も残したディエゴ・リベラ。メキシコ壁画運動における重要な草分け的存在であり、（これはあくまで私の考えですが）極めて明快な歴史描写、鮮やかで美しい色使い、社会主義的思想が強く反映された作風、そして3大巨匠の中では最も写実的な作品を残した画家と位置づけることができるかと思えます。②は国立宮殿の階段部分に描かれた巨大壁画『メキシコの歴史-征服から未来へ-』の一部分。切望の眼差しで何かを訴える女性や子どもの手元に抜粋されているのは、マルクスの言葉です。



③：UNAM中央図書館の壁画は、ファン・オゴルマンが描いた世界最大壁画。北側にはアステカ文明を、南側には植民地時代の圧政を、東側には太陽・月・宇宙・科学・政治とその関係性を、西側にはUNAMの校章と学問のあり方を、なんと全て自然石で描いています。午後に受講していたメキシコ美術の授業では、なんと2時間にわたって構内の壁画の説明を受けました。笑

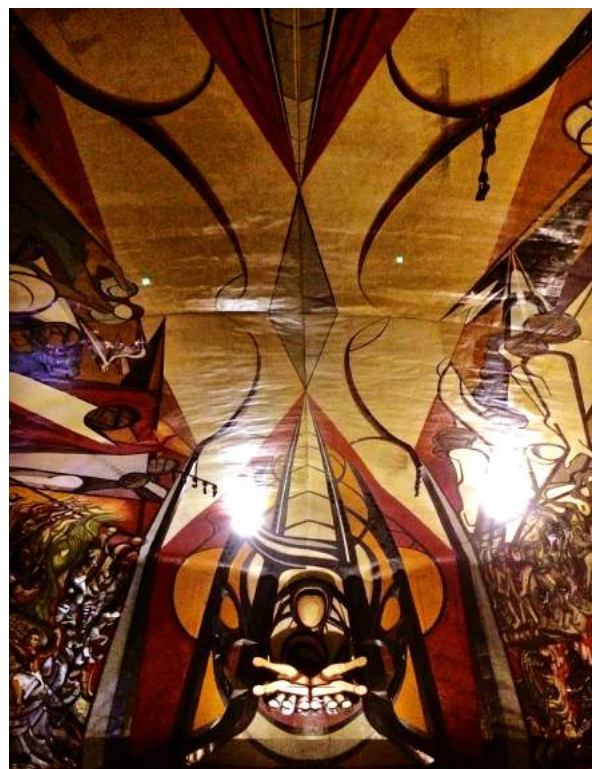
④：旧サン・インデフォンソ学校に描かれたオロスコの作品『コルテスとマリンチェ』。マリンチェ(右)は身売りされた貧しい原住民奴隷でしたが、マヤ語、ナワトル語、スペイン語を解する非常に聡明な人物でした。彼女はのちに通訳者としてコルテスに遣え、彼女の仕事がコルテスのアステカ帝国征服に多大な貢献をしたと言われています。メキシコでは、マリンチェは完全なる「裏切り者」の代名詞。でも部外者でしかない私くらいはせめて、彼女という1人の人間の存在を想像したいなと願います。本当のところはたぶん、誰も彼女を責めたりできないもの。

## シケイロス — メキシコと日本を結ぶ？メキシコ人壁画家の哲学 —

さて、私が壁画運動3大巨匠の中でも特別な関心を持っているのは、芸術家 **岡本太郎** に多大な影響を与えたことで知られる男、**シケイロス**です。メキシコの極めて裕福な家庭に生まれ、熱狂的なジャコバン派に属していた祖父の影響もあって帝国主義に激しい反発を抱いていたシケイロス。14歳から昼夜ダブルスクールでフランス語と美術を学ぶ一方、ディアスの独裁体制に未練を残す学校教育に不満を募らせ、学生運動にも精力的に参加。その後も様々な労働者密謀に加わったり、憲法護持派の軍隊に入隊して中尉として戦ったりしながら、常に同時平行で自らの芸術的表現の確立を求めて若手芸術家や前衛グループとの親交を深め、討論を重ねてゆきます(彼は芸術家としても活動家としても多くの文書や機関紙を残しました)。1919年、留学先のパリでディエゴ・リベラに壁画構想を打ち明けられたシケイロスは深く共感し、壁画を学ぶため世界を渡り歩き始めます。“あまりに目立ちすぎる”社会主義的活動で逮捕されたり国外追放されたりを繰り返しながらも、アメリカ滞在期には、それまでに考えられなかった**コンプレッサー**や**エアブレーガン**などの**新たな道具を使用し、セメント下地にフレスコ技法を用いる、原色を用いてダイナミックな効果を図るといった新技法**に次々と挑戦しました。「とにかく、すべてが新しくなくてはならない」。それはメキシコ壁画運動が西欧にとって「ローカル」で「革命達成のための政治的ツール」としてしか理解されていないと感じていたシケイロスが、国際的現代美術の世界におけるより普遍的な、「**芸術自体の革命**」としての**壁画運動**を確立するために、そして植民地時代以降ずっと非西欧社会に続いている西欧支配のパターンに一矢むくいるために、生涯かけて貫いた信念、挑み続けた壮大な挑戦でした。そんなシケイロスの作品が、“進歩”なるものを信じて近代化の道を突き進んできた日本の、その芸術家達の心を掴んで多大なる影響を与えた…そこに特別な理由が存在するとすれば、それはこのメキシコ近代美術の、葛藤に満ちた近代史の過程で獲得されていった特異な「新しさ」への執着、そこに行き着くまでの哲学に答えがあるのかもしれません。シケイロスはオリジナルな価値の提出に向けて、ついにはフレスコ画につかう顔料、石灰や白亜を主成分としてきた下地材の材料すらも見直し、新素材の開発に成功。そして新たな画面構造体へのあくなき探求心は、常識であった絵画の「平面」という性質をもぶち壊すに至ります。

## 実際の作品を見て (井上の絶望的に終わりなき感想 笑)

右はレポート冒頭にも少し触れた、ポリフォルム・シケイロス内の作品『人類の行進』の一部。写真では下手すると壁画(平面)にすら見えますが、シケイロスが実際に作りあげたのは、**複数の「立体壁画」によって紡ぎだされた、ひとつの「立体空間」**。いや、本当は文献では“多面壁画”というような表現を見るのですが、ここでは私の見たこと思ったことを好きに書きます。笑 確かに、この作品は様々な種類の金属板・針金・木材・顔料などを用いて描かれた凹凸ある複数の壁画でできていますが、それは構造の話。作品自体は、それらが私達を囲み込むことで作り出している空間全体だと思えます。つまり、シケイロスが(八角形を横に引き伸ばしたような)歪な形状のホール内に伸ばしたより自由で立体的な軸が、xとyの次元では取り込み逃してしまう連続性や広がりをも十分に表現しきっていることこそ、私には肝心要に思えるのです。(個人的見解 笑)。それは理想に挑む人類の勇姿のその「一瞬」、「一場面」の記録などではなく、その人類の力強い営みが昔と今、人と人、思想と思想へと無限に伸びて結びついていることを知らしめるための、時間的・物理的な壁を丸呑みして含み込む巨大装置。普段私達と一般的な壁画(あるいは一般的な平面絵画)との間に存在する「見る人」と「見られる作品」という関係は、私達とこの作品との間には成立しえない。この場所を訪れた小さな人々は、ただその3次元作品の内側に自動的に取り込まれ、自分もまた「人類の行進」という営みの中にいるのだ、そこに含まれているのだということ、実体験として思い知る他ないように思います。絵画の何か一般的な定義のようなものすら殺しにかかっている、この新しすぎる作品こそ、シケイロスが一生かけて突き詰めてきた社会思想と普遍的価値表現の集大成といえるのかもしれません。



またシケイロスの作品において、「手」は労働者、革命を起こした一般民衆の力強さと正しさを表現する非常に象徴性の高いパーツだと言われています。この空間の内側で嘘偽りなく差し出された手のひらに小さく立ちすくむ時、私には、「お前だって煮え滾る理想を持ってははずだ、私に続いて自ら闘え！」そんな風に強く誘われているような気がしました（頭は正常です…Espero que sí.）。さらに、写真ではよく映らないのですが、この手の位置はちょうど心臓に続く高さであり、心臓の位置にははずんと大きな暗い穴が空いています。ここにあるべき心臓は一体どこに行ってしまったんだろう？とずいぶん考え込んだのですが、ふと、いやもしかすると、この巨大な顔無し人間は、実は自分なのかもしれないとさえ思いました。私はこの大きな手に、すなわち自分にも備わる”人間の本質的な強さ”のようなものに、自ら誘われているのかもしれない。だってそこにあるべき心臓なら、私が今ここに持っているじゃないか、……なーんて。この穴の存在は、空間が更に大きく膨張していくような印象も与えているような気がします。

ま、そんな自分でも謎な感想はともかくとして、少なくともこの空間は、ただそこにいてだけで苦しくなる、暴力的でグロテスクな空間でした。どぎつく彩られ抽象的に昇華された人々、骨や肉をむき出して強調する構図、そして何より、その混沌とした酷く莫大なエネルギーを束ねあげ、導こうと這いまわっている黒い立体的な線。私は胃がよじれるような心地でそれに耐えた後、この空間のエネルギーに対等に張り合える人間にならなくては、身体に備えられた能力を持って余すような馬鹿から抜け出して、自分で命の使い道を決めて歩かなければと、至極自分勝手に思い至りました（…帰国したら就活生の身なんです 笑）。このポリフォルムへの訪問は、シケイロスという人間の厳しさ、そしてその最高のかっこよさに直に触れ合えた本当に素敵な体験になったと思います。人が命を削って築いたものは、実は生身のその人自身よりその人らしくなるのかもしれない。ああロマンや。ロマンやねえ。

44期日墨研修生としてメキシコに派遣して頂いてからもう9ヶ月。スペイン語の難しさには未だにグロゲロしていますが、それでも今はなんとかこうして、文献を集めたり実際に作品を見に行ったりしながら、スペイン語を使って「メキシコでやりたかったこと」を実行することが可能になりつつあります。残された研修期間は僅かですが、できることを着実にこなしていこうと思います。そして私が学び取ったことが何らかの形で、メキシコと日本の人の心を近づけることに役立つといいなと、なんかちょっと大層なことを言ってみたりしてみたい今日この頃です。口ではなんとでも言えるのが、人間の(というか私の?)最たる問題ですね。時々言葉を学びながら、言葉をぜんぶ忘れたいくなります。シケイロスのように、行動で示さねば。…ふう、これを最後まで読んでくださった方がいたら、メキシコのグロ甘お菓子(おいしいとは言っていない)をプレゼントしますよ、ありがとう。これが口だけかどうかは、帰ってからの楽しみで。笑

